



「下村満子の生き方塾」ニュース

Vol.04 2016.08

—ザベリオ学園会津若松 出前塾特集号—



中・高校生に初の講話

「下村満子生き方塾」「出前塾」の第一回目は、7月7日、会津若松市の会津若松ザベリオ学園講堂で開かれました。

「生き方塾」を分かりやすく紹介するDVDを流した後、下村塾長は、同学園の中学生、高校生、保護者、教職員ら700人を前にして、①70兆分の1の確率でこの世に生まれたあなたたちは、いかに素晴らしい奇跡的な存在であるのか②あなたたち一人ひとりには地球上に命が誕生してから今日までの38億年の「いのち」が入っており、「いのち」はつながっており、それを地球上のみんなで分け合っていることを覚えて欲しい③強い思いは必ず実現する。絶対諦めないで、夢と思いを追い続けていけば、あなた方の人生は、素晴らしい人生になる—の3点を柱にして、90分ほど講演しました。

「出前塾」には東京代表世話人の千田利雄塾生、福島世話人で地元会津若松の原田まり子塾生、福島代表世話人の皆川猛塾生も同席し、「生き方塾」で何を学び、実践しているか、などについて、話をしました。質疑応答には3人が立ち、塾長に「これまでの人生で一番辛かったこと」、「18歳選挙権に関連し政治にどう向き合うか」、などについて質問がありました。「出前塾」は午後1時から3時前までの昼食後、生徒にとって一番眠い時間帯であったにもかかわらず、コックリする生徒はほとんどいませんでした。

次回「出前塾」は、9月30日(金)、福島市の有朋学園で行います。塾長講演を抜粋して掲載します。

●若い時にこそ「生き方」を学ぶ

「生き方塾」はカルチャーセンターでも、教養講座でもありません。「命とは何か、生きるとは何か、人は何のために生きるのか」といった学校はもとより家庭でもあまり教えない人生の一番大切な事柄をテーマにして、ともに話し考える場です。普段の生活では、いい学校に入って、いい職場に就職し、いい相手と結婚してといったことが話題でしょうから、誰もやらないテーマを掲げる「生き方塾」はそういった意味では異色だと思うのです。

今日の講演テーマは「生きるとは何か」「命とは何か」です。「生きるとは」と聞くと、皆さんは何を想像しますか。昔は人生50年と言われましたが、今は100歳の方も珍しくありません。生き方も様々で、生き方は「もう十分学びました」ということはあり得ないと思うのです。学校に行っている時は、小学生なら小学生の悩み、中学生なら「高校はどこにしようかな」「将来の大学はどうしようかな」「好きな人ができたけど…」「異性との付き合いで親とうまくいかなくなった」などといった悩み、高校生なら、大学進学が大きくかぶさってきます。大学卒業が近くなるとどこに就職するかが問題になってきます。やっと就職問題が解決すると、今度は職場での悩み、結婚をどうするかなどでいろいろ悩み、家庭を持てば子どもを持つとか、どう育てるか、女性なら仕事と家庭をどう両立させるかなどで悩みます。時には夫婦げんかもあります。ようやく子どもが皆さんぐらいの年代になると、反抗期を迎えるから、親としての悩みは決してなくなりません。子どももやっと仕上がり、大学を出たけれども今度はなかなか就職しない、結婚もしない、いつまでも親元を離れないなどといった、新たな悩みがまた生まれてきます。これらの悩みがようやくなくなったと気付いたら、その時の自分は中高年になっており、リストラや年金の不安に襲われます。さらに定年後の生活設計で悩み、私ぐらいの年齢になれば人生のエンディングをどう迎えるかで悩みます。

先程、守屋学園長は「私ぐらいの年になったら、『生き方塾」

で学んでも遅すぎる」といったようなことをおっしゃいましたが、生き方を学ぶには適齢期はないと思います。それは各年代によって悩みは違ってくるし、私自身も年相応の悩みや困難を抱え、生き方については毎日悩み、学んでいるのです。でも、どう生きるか、命とは何かといった生きる上での一番大切な根本的テーマは、できるだけ若い時から学び、考えることは、非常に有意義で、また大人になって困難に遭遇してから学び、考えるよりはるかに生きていく上で役立つと思っています。

幸せに生きたいというのは、人間なら誰もが持つ願いです。では「幸せとは一体何でしょうか?」お金持ちになること?有名になること?なるべく楽をして大金持ちになったり、有名になるのは、いまの時流に沿った考え方でしょうが、それで本当に幸せなのでしょうか。何も考えずに、楽して得た幸せは一瞬のものでしかないと思うのです。人生には谷も山もあります。安易に生きていくと、壁にぶつかった時、どうしてもならず自殺したり、やけになって事件を起こす。こうしたケースは決して珍しくありません。

生徒の皆さんにとっては、しっかり勉強をして知識を積み重ねることは大事なことです。それ以上に大事なことは、知識を他人のために役立てる生き方の基本を学ぶことだと思います。若い時にこそ、生き方の基本づくりをすることが大切なのです。それは別の言葉で言えば「人間力」です。人間として生きていく力です。守屋学園長は「世界の果てに行っても平和に貢献できるような人物に育てることが学園の使命」とおっしゃいました。今、世界は各地でテロや内戦、紛争が起きている激動の時代を迎えています。今日の平穏が明日も続く保証は一切ありません。



守屋学園長

何が起るかわからない激動の世界の中で、日本人もアフリカや中南米、中近東の奥地に出向いて仕事をする人が増えてきました。交通手段の発展や情報発信の迅速化、世界規模の経済活動などによって、地球は小さな家のような感じずらします。そういう意味で、私はどこにいても、どんな変化に巡り会っても、何が起っても、右往左往しない、慌てふためかないどっしりした生き方、考え方を築き上げることが必要だと考えています。今の日本人はほんの些細なことで大騒ぎするひ弱な人間になってしまったと感じています。日本は世界有数の「自殺大国」なの。日本国民は平和で、しっかり守られている国だから、危機に弱いのでしょうか。

実は私の人生は波乱万丈で、テレビドラマになってもおかしくないくらいいろいろな体験、経験をしてきました。でもその話をすると、時間がなくなってしまうので、機会があれば次回にし

●「心の再生」のカギは利他

なぜ「生き方塾」を立ち上げたかという、「ジャパン アズナンバーワン 世界一の日本」と言われていた日本なのに、ここ20年間は地位が急速に下がりました。教育が充実した国、経済大国、素晴らしい国と、羨ましがられていたのに、日本の教育水準は、OECD経済協力開発機構という先進国組織の調査でかなり低いことが分かっています。東大出さえもがベスト5に入っていません。さらに社会全体が品格を失っており、思いやりにながれた粗雑な社会に転落しています。舛添さんがそのいい例でしょう。舛添さんは東大卒ですが、下着まで国民の税金で賄う政治資金を使って買ったのですから。舛添さんはじめ、大企業のトップたちは東大卒業ですが、企業の決算を誤魔かすなど、悪いことをしています。つまりいい大学を出たから、いい人間になる、立派な人生を送っている、というのではないのです。

私たちがリーダーと仰ぐ政治家たちも、汚職まがいのことをするなど情けない残念な状況になっています。私はどうして日本がこれほどまでにすさんでしまったのだろうかと考えました。先の戦争で日本は敗れて全てを失う無一物になりました。どうしたら食べられるか、どこで雨露をしのげばいいの、といった敗戦の廃墟から私たち日本人は立ち上がり、死にもものぐるいの努力の末に世界有数の経済大国にまでなりました。しかし、物質的な豊かさとは反比例し、心は貧しくなりました。心を病んでいったのです。難しい言葉で言えば、心が「劣化」したのです。物質的に豊かになった時に、モノ最優先から、心を大事にするシフトへギアチェンジしないまま、相変わらず物質的豊かさやお金、肩書などを追求する活動を最優先してきました。

こうした事情から、私は日本人の心の再生なくしては、日本という国の復興はないと考えました。日本に住む私たち一人ひとりの心のレベルを上げないと、日本のレベルが上がるわけではないのです。世界の国々から、「やはり日本はすごい」と評価されることはないのです。これが私の結論です。「そんな馬鹿なことをして何になるの」と笑われているのですが、ここで「もういいや」と諦め投げってしまったのではそれこ

たいと思います。ジャーナリストとして、一人の人間としてこれまで生きてきたその基軸と言うか、基本を話したいと思います。

私の先祖は福島県と深いつながりがあります。父は二本松市、母は福島市出身ですから、私のDNAは福島県産ということです。第二次大戦で日本が敗れ、中国東北部から引き揚げてきた私たち一家がひとまず落ち着いたのは、おばあちゃんが留守番をしていた二本松の父の実家でした。3人兄弟のうち、私だけが2年間二本松にいて、地元の小学校に通いましたから、兄弟の中で私が福島に対する思い入れが一番強いのです。朝日新聞社に入り、ジャーナリストとして世界を駆け巡りましたが、医療法人を経営していた父が亡くなったため、朝日を退職し、今度は父の後継者として500人従業員を抱える経営者になりました。



そ、何にもなりません。先程のDVDでも、一粒の種とありましたが、播いた一粒の種から芽が出て育つかもしい。そんな思いで「生き方塾」を両親の故郷である福島県で立ち上げました。塾生は福島の方が半分ぐらいで、もう半分は全国からきています。

では心の再生とはどういったことでしょうか。別の言葉で言えば、心のレベルを引き上げるということです。自分のことだけを考え、「俺が、俺が、俺が」と他人を蹴飛ばしてでも自分の利益だけを優先する。他人に対する感謝、思いやりなどは一切考えない。これは利己主義、「ジコチュウ」であって、心のレベルは低いです。

これとは逆に、「利他」という言葉があります。自分以外の人のために、いろいろやってあげたり、力になってあげる行いで、利他をする人は心のレベルが高い、と私は考えるのです。別の言い方をすれば、「他人に優しい人」「親切を実践している人」「他人を愛する人」です。他人のために何かをやることは、自分にとっての喜びでもあります。ちょっとした親切をして「ありがとうございます」と言われた経験を皆さんも経験しているでしょう。相手よりも自分の方が、嬉しいかもしれません。喜びや嬉しいと思うことが幸せなのです。他人のために何かをすることは、犠牲ではなく自分の幸せになるのです。

もう一つ、心のレベルが高い人は、自分の進む方向で迷った時、損か得かで判断するのではなく、人間として正しい道はどれなのかを、判断基準にしていることです。嘘をついたり、ごまかしをするのではなく、損をしてでも、人間として正しいことをやります。人間として正しい行いをやることによって、その人の誇りが保たれ、利他と同じようにそのことによって嬉しい気持ちになり、幸せを感じることが出来ます。

ところで、「何のために私は生まれたの」「どうして私はここにいるの」などと、皆さんはあまり考えませんよね。でも本

当は、「私は何のために生まれ、何をすべきなのか」を考えないと、毎日「食べては寝て、食べては寝て」の生活になり、死を迎えるだけになります。若い、若いと思っているけれども、気が付いたら、年寄りになっているのです。

皆さんはどこから来て、どこに向かっているのですか？お母さんのお腹から生まれました、と答えるでしょう。ではお母さんのお腹に入る前にはどこにいたのですか？分からないでしょう？そういう本質的なことを誰も考えずに、毎日面白おかしく生きているのが大部分の人です。生まれて親に育てられて学校を卒業して、就職して結婚して子どもを生んで育てて、気が付いたら50歳になっていた。こんな人が大半だと思います。その間には楽しいことも辛いことも、悲しいことも病気になったりと、いろんなことがありますね。その試練の時にどうして乗り越えていくか。不幸や試練をどう乗り越えていくのか。それこそが生き方なのです。

若い時から生き方の基本を学び、身につけていけば、ピンチに遭遇した時も、乗り越えることができます。苦しいこともきちんと受け止めて、これは自分が試されている場なのだ、

●まず自問自答する

私は敗戦という激動の時代を過ごしましたが、若いあなた方は私とは違った意味で激動の時代に直面していると言えます。世界中が繋がっていて、世界の片隅で起きたことが日本にも瞬時に伝わり、それが日本人の生活にも大きな影響を与える。何が起きても不思議でない時代に生きるからこそ、何事にも動じない「人間力」を養うことが大事です。もちろん学校の勉強も大事なことは言うまでもありませんが、教わったことをただ記憶し、試験で良い点数を取ることで、「人間力」をつけるのにあまり役立ちません。実社会に出た時、教わった知識をどうやって社会のために役立てていくのか、応用するのか—それが大事なのです。成績が悪いことで、自分は駄目なのだと思ってしまう必要はまったくありません。自分で自分の人生に×をつけるのは、一番「人間力」がないことになります。

皆さんは学校や職業を選ぶとき、親や周りの人、先生たちからいろいろ助言を受ける。それは大事なことです、最終的には自分で選ぶしかないので。あなたの人生に親も最終的な責任は持てません。なぜなら、あなたの道を歩むのはあなた一人であって、親といえどもあなたに代わって歩くことはできません。自分の足で立つしかないので。最近の若い人の中には、自分は「何をやっていいのかわからない」という人が増えています。でも本当は何をやりたいのかわからないのではなく、自分と真剣に向き合っていないのです。周りが自分をどう見ているのかばかりを気にして、何をやりたいの、どんなふうに生きたいのかと、自分で自分を見詰める、自分は一体何者かと自問自答する、といったことはしていない気がします。いい大学に入ったね、いい会社に就職できたね、すごいね、と周りから言われことを期待して生きているように思えるのです。自分は何をやりたいのかを、自問自答しなければなりません。それをしていると、初めはボンヤリしていたものが、

と割り切ることができます。私は初めに失明の話をしましたね。失明を宣告された時には自殺まで考えました。活字を相手に仕事しているジャーナリストにとって、失明は死刑宣告と同じですから。でもこうした体験をしたからこそ、病気の人の心の痛みが以前より、もっと分かるようになりました。この年になっても、失明宣告から多くのことを学んだのです。だから失明宣告は神様が、私の心のレベルを引き上げるため、私に与えた試練と考えることができました。私とは逆に、失明宣告をただただ不幸だ、不運だと考え世をうらむ人もいますでしょう。同じ状況にあっても、受け止め方は千差万別です。

つまり人生は、考え方、受け止め方によって、同じ状況でも全く変わっていくのです。その人の心のレベルによって、変わっていくのです。同じ苦しみでも、それを逆手に取って自分のプラスになるよう頑張る人と、ただただ嘆き悲しむ人がいるのです。自分を取り巻く環境は周りが作ったものではなく、自分が招き作ったものだと思うのです。環境は自分の心、考え方一つで変えることができます。

次第に固まってきます。そうして見つけた本当になりたいことは、困難があってもあまり苦労とは感じないものです。



母は医者だったので、母も父も私を医者にしたかったのです。私も両親の思いにこたえて医者になろうと思い、慶応女子高に入りました。学年で2番以内なら推薦で慶応の医学部に入学できるからです。でも、学年を重ねていくうちに、どうしても、ものを書くのが好きで、活字の周辺の仕事をしたいと強く思うようになりました。物書きになるとか、新聞記者になるとかいうような大それた考えではありません。原稿取りでもいい。活字周辺の仕事とはそういうことです。元々文字の世界には興味があり、幼稚園の頃から字を書いていたようです。

両親が勧めたように、医者は当時の女性にとって、収入の点でも、社会的地位からいっても、とてもいい、有利な仕事でしたが、どうしても、私は医者になる気が湧きませんでした。それで親に、「どうしても医学部に行く気になれない、活字周辺の仕事をしたい」と伝えましたが、当時は女性にそういった道が開けていませんでしたから、分かってもらえませんでした。ジャーナリストになるまでには障壁や苦労の連続でしたが、自分が好きだった道だから、苦労も苦労と思わずやってこれたのです。ですから皆さんもまず、何をやりたいのか、どんな人生を送りたいのかを自問自答する習慣をつけ、他人の目とか、他人から言われることを気にしないで、自分と向き合ってほしいのです。

私が手にしているのは、筑波大名誉教授で遺伝子学者の村上和夫先生がお書きになった子ども向けの絵本ですが、この中で村上先生は、命は38億年前に、一つの遺伝子から始まりました。それが38億年の間に分裂を繰り返して、現在

3千万種類の生物になりました。人間もそのうちの一つでしかありません。魚も、花も、蝶も、象も、鳥も、ゴキブリも、そして人間も、先祖をたどっていくと源は38億年前の一つの命にたどり着きます、とっています。ということは、単細胞の初期の生物から人類のような高等動物まで、みんな先祖は同じであり、みんな命は繋がっているということです。

人類は、色が黒い、白い、黄色い、言葉や宗教が違っていると、殺し合いをしますが、今話した3000万種の全生物は親せきということになり、まして全人類同士は、最も近い兄弟姉妹なのです。人類同士は敵なのではなく、一つの命を共有しているわけですから、仲良く地球の上で助け合って生きていくのが、本来の姿なのです。「なぜ人を殺してはいけないのか」と本のサブタイトルにあります、相手を殺すことは自分を殺すことでもあるからです。

●環境を変えて遺伝子ON

人間は同じ遺伝子情報を使いながらも、顔つきも、体系も、得意とする分野も皆違います。「生まれつき自分は頭が悪い」「自分は音楽の才能がなくて音痴だ」「私は運動神経がないから」などと人はよく、ネガティブなことを言いますが、実はそうではないのです。村上和雄先生は、ノーベル賞を受賞した物凄い科学者と、私たち凡人との遺伝子の差は、たった0.1%ぐらいしかない、と言います。チンパンジーと人間の遺伝子の差も、わずか1.5%。ほとんど差はないのです。どんな人でも無限の可能性を秘めているわけで、どうして差が生じるかというと、村上先生は、大多数の人は自分の遺伝子の3%しか使っていない、と言います。残りの97%の遺伝子は眠ったまま死んでいくのです。その中には悪さをする遺伝子もあるから、眠ったままの方がいい遺伝子もありますが、何とも、もったいない話です。でも遺伝子のスイッチはONしていないだけで、能力がないわけではないのです。

生まれもっている遺伝子を花開かせること、遺伝子のスイッチをONすることを神様は願って、平等にDNAを人間に与えたのだから、自分と向き合って、自問自答しながら自分のやりたいことを見つけ、与えられたDNAのスイッチをONにしなければならぬのです。他人のまねをしても、本当の自分ではありませんから、遺伝子のスイッチをONできません。

眠っている遺伝子のスイッチをONするにはどうすればいいでしょうか。それは、外部からの物理的な刺激や、化学的な刺激によって、入ったり、切れたりすることが分かっていますが、村上先生は、精神的なストレスによっても、遺伝子のスイッチがONになったりOFFになったりするのではないかと確信し、1997年にこれを仮説として発表し、「愛が遺伝子のスイッチをONにする」という本も書いています。愛の心が一番、いい遺伝子のスイッチを入れてくれるのです。

その当時は村上先生の仮説を証明するデータはほとんどなかったのですが、後に実験によって、ストレスが遺伝子のスイッチを入れたり、切ったりすることに影響を与えていることが分かりました。ストレスと聞くと悪いイメージしか思い浮かびませんが、笑い、喜び、感動、感謝などのポジ

先程、私は皆さんに「どうしてここにいるの。そんなことを考えたことありますか?」と聞きましたが、皆さんがこの世に生を受ける確率は、70兆分の1だそうです。これはとジャンボ宝くじに、百万回連続当選するぐらい、非常に低い確率なのです。お父さんの染色体は23個、お母さんの染色体も23個あります。これが掛け合わされて生まれる子どもの組み合わせパターンは70兆もあるそうです。で、あなたはその70兆もの組み合わせパターンの中から、一つ選ばれて生まれてきました。受精卵の確立、染色体の組み合わせパターンという高いハードルを乗り越えてきたあなたは、たった一つのかげがえのない命、エリート中のエリート、奇跡の存在なのです。ここに存在するだけで、すごいことなのです。まずそのことに感謝することから始めましょう。



ティブな心、気持ちもストレスなのです。ストレスとは「心の状態」なのです。いいストレスはDNAを

ONにすることができます。遺伝子のスイッチは知識の働きで作動するものではなく、感情の動きである感動によってONになったりOFFになったりするものなのです。失敗も遺伝子ONに作用します。

面白い、おかしい、悲しい、好き、嫌いなどの感情こそが大切である、と村上先生は言います。だから失敗を恐れることもないのです。成功すると気持ちがワクワクするから、スイッチがONになります。

私は1962年夏、ニューヨーク大大学院に留学しました。英語が堪能であることが条件でしたが、そこを上手くごまかして、英語ができることにして、単身渡米しました。授業料免除、しかも寮費はただで、お小遣いまでももらえるいい条件の留学でした。でも私の当時の英語力はお恥ずかしい限りで、たちまちバテてしまいました。日本に強制送還されそうになりましたが、学部長に泣きつきました。1学期の間に英語力をマスターするから、強制送還しないでほしい、と。それから3か月、私は必死で英語を勉強し、夢も、寝言も英語というまでに英語力を身に付けました。環境が一変したことで、言語習得の遺伝子がオンしたのです。アメリカ留学の2年間に、私の数々の遺伝子はスイッチが入りましたね。

つまり、人間は一生懸命に人間として正しい道を歩み、自問自答した上、自分が決めた道に沿って一生懸命がんばっていれば、いい遺伝子のスイッチが入るのです。でも最終的には「愛」という神様がおっしゃるような要素が人生を決めていく。これが科学的に証明されていることに驚くのです。実際、科学は神様の世界を証明しつつあるのです。ここで言う神様とは大宇宙の大摂理を動かしているメカニズムとでも言いましょうか。村上先生は遺伝子配列は信じられないほど

完璧で美しく、大きな神秘的な力、something great(偉大なる何者か)の存在を認めるしかない、と話しています。私はそれを大自然の摂理と言っています。

村上先生は遺伝子配列を解明した自分は偉いと最初は思ったそうですが、よくよく考えれば、きちんと遺伝子を配列した、遺伝子配列の設計図を描いた存在が一番偉いのであって、自分はそれを発見したに過ぎない。このような存在をサムシンググレートsomething great(偉大なる何物か)と言うしかないとおっしゃっています。科学者がいくら頑張っても、乗り越えることができない「偉大なる何物」なのです。最近、科学者たちも、科学の力では決してできない事柄を、つまりサムシンググレートを、「宇宙の意志」と呼ぶようになりました。

一方、仏教の世界では因果必然の法則と言って、全ての事柄は原因があって結果があると教えています。だから自分に降りかかってくる嫌なことも、自分が招いたものと考えます。キリスト教でもいいことをすれば神様から祝福され、悪いことをすれば罰を受けるというのは、どんな宗教でも同じで、他人を殺してもいい、と教える宗教はありません。先程話したように全ての命は繋がっており、しかも自分はいろんな人のお世話になって生きています。自分一人で生きていくと勘違いする人もいますが、命をつなぐ食物は農家の人が作っています。水、電気もそれを一生懸命作る人のお蔭なのです。清潔な環境で生活できるのもゴミを集め処理してくれる人がいるからです。みんなのお蔭で生きているわけですから、神様からもらった貴重な命を無駄にしてはいけなと思うのです。自分が見つけた本当にやりたいことを一生懸命やるのが、支えてくれている人たちへのお返しになります。さらにできる範囲で他人が喜ぶことをすれば、それは自分に、喜びとなって返ってきます。そういう命の連鎖反応を、大切にしたいのです。

仏教には「山川草木悉皆成仏」という有名な言葉です。現在ある3000万種の生き物の源はたった一つの命であることは科学によって明らかにされましたが、この言葉は、人間だけでなく、山や川、草や木といった大自然にはすべて仏＝命が宿っているという意味です。また人は70兆分の1の確率で生まれてきたことを、仏教では「衆生本来仏なり」と言います。衆生とは私たち凡人を指し、私たちは元々は仏の資格を持っている、というものです。仏とは非の打ちどころがない

人です。

経営不振に陥っていたJAL(日本航空)を再生した京セラ名誉会長の稲盛和夫さんは、「生き方」という本を書きました。この本の中にはこれまで皆さんに話した内容も書かれていますし、講演の前に流したDVDに出てきたドラマ法王も同じようなことをお話しています。代表的なものは「自分が思い描いたことは必ず実現できる」です。稲盛さんが若者向けに書いた本に「きみの思いは必ず実現する 21世紀の子供たちへ」があります。これは慰めで言っているのではなく、その代り、思いは寝ても覚めてもひたすら思い描き続けるのです。寸暇を惜しんでひたすら考え、失敗を恐れず努力していれば、必ず思いは実現します。ジャーナリストとして私が今日まで続けてこられたのは、この道が本当にしたいことだったからで、目標に向かって少しずつ前に進んだ結果でもあります。好きな道なら苦労も苦労と感じません。

今日言いたかったことは、自分がいかに素晴らしい存在であるのか、命とはどういうものなのか、そして命は自分一人のものではなく、次々に受け継いでいく。あなたたち一人ひとりの中には38億年の命が入っており、それをみんなで分け合っていることを覚えて欲しいのです。そして強い思いは必ず実現するという。世界を平和にしたい、人殺しが社会にしたいと、一人ひとりが強く念じていけば、必ず実現します。絶対諦めないで、夢と思いを追い続けていけば、あなた方の人生は、素晴らしい人生になると思います。いいことを地道にやっていたら、結果は必ずついてきます。そして、失敗も苦労も含めて、人生を前向きに生き、楽しんで生きて下さい。(文責・皆川猛)



同席塾生の一言

千田利雄塾生…「生き方塾」で得たものです。入塾するまでは自分の人生と真剣に向き合ったことはありませんでしたが、今、生きる上で必要な2つの判断基準を持っています。一つは「人間として何が正しいか」です。もう一つは「他人のために尽す」です。目標をもって頑張れば素晴らしい人生が開けると思います。

皆川 猛塾生…福島民友新聞社で論説委員を務めていた時、下村さんが半生を語る連載企画「人生春夏秋冬」を担当しました。それが縁になって「生き方塾」に入りました。この塾では多くの学びがあります。その一つが瞬間、瞬間を完全燃焼で生きる、です。今を完全燃焼して生きていけば、明るい未来が待っています。

原田まり子塾生…先生の言葉からいただいた「種」を実践しています。熊本地震があるなど、国内ではいろいろな災害が頻発しています。そこで、町内会で自主防災組織を立ち上げました。避難訓練、危険個所の点検、防災新聞の発行などをやってきました。市長はじめ多くの方から注目を集めています。利他という塾長が播いた「種」が育っているところです。

●失明宣告は修行の場



Q.先生が今まで生きてきた中で一番辛かったことは何ですか(中3)。

A.一つは大学を卒業し、1,962年アメリカに留学した時だと思います。1ドルが360円の時代で、海外渡航にはいろいろな制約がありました。外貨持ち出しには制限がありましたから、アメリカの奨学金をもらえなければ留学できませんでした。奨学金、しかも生活費まで与える大学を懸命に探したらニューヨーク大がありました。アジアから年に一人にだけ与えられる奨学金でした。大学院に入るわけですから、条件は英語に堪能であること。そこで私は知り合いのアメリカ人に「下村は英語がペラペラ」という証明書を書いてもらい、ニューヨーク大に入れました。

当時の英語力は観光旅行には困らない程度でしたから、大学院の授業にはついていけません。それが発覚し、私は退学、強制送還されそうになりました。学長に退学、強制送還を何とかやめてもらえるように涙を流しながら、頼みました。その結果、英語学校に3カ月通い、その間に十分な英語力を付ければ、大学に置いてくれる約束を取り付けました。厚かましいことに、お金がないから英語学校の学費まで面倒見るよう頼み、学長はそれも認めてくれました。こうして朝起きてから眠るまで、土日も関係なく必死で英語の勉強を重ね、夢まで、寝言まで英語でするようになりました。時には英語の本で押し潰される悪夢まで見ました。こうした努力の結果、英語力はOKとなり、無事大学院で2年間勉強できました。

もう一つは昨年末の失明宣告。手術しても8、9割方、失明は免れない、というものです。目はジャーナリストにとっては命です。目が見えなくては字も書けないし、本も読めない、世の中を見ることもできません。宣告された時は、もう死ぬしかないな、と思いました。「人生の絶壁」に立たされました。でも、今は皆さんの顔を霞を通して見ている感じでぼやけていますが、眼鏡をかければ一応字も読めるし、見えるだけで感謝です。不自由ではあるけれど見えるだけありがたいと思うのか、それとも不自由さを悲観して毎日なげいてくらすかで、気持ちは大きく変わります。今回の失明は心のレベルを高めるために、神様が与えてくれた修行の場だと感じています。

Q.「生き方塾」を立ち上げて一番大変だったことは何ですか(中3)。

A.開塾から5年経ち、私も含めて5歳歳を重ねたこと。福島には打ち合わせのため、毎月何回か東京と福島の間を往復しなければならない物理的な大変さと、「生き方塾」が軌道に乗るまでは試行錯誤の連続でした。開塾から6年目に入り、塾生の高齢化も進んでおります。昨年末の失明宣告の際には、もう止めようかとも思ったのですが、この塾は私が本当にやりたかったことで、塾生も今や家族同然です。だから大変なことも試練だと思って、塾生ともども続けていく考えです。毎月一回、朝10時から夕方5時までやって、夜は車座になって食事をしながら本音で語り合う。確かにハードですが、私の思いの結晶であるこの塾だけに、苦労も苦労だとは思っていません。やりたいことをやる時には、苦労を苦労と

思わないと言いましたが、その通りです。人生というのは、自分でやりたいことを見つけ、それをやり遂げる長い自己発見の旅でもあります。

Q.選挙権が18歳に引き下げられました。若い世代ほど政治に無関心と言われていますが、政治にどう向き合ったらいいですか(高3)。

A.日本も世界も、一人ひとりが変わらないと、政治は変わりません。今の世界で、一番どうしようもないのはリーダーと呼ばれる各界のトップたちです。魚は頭から腐る、と言いますが、舂添さんではないけれど、生き方のモデルとなるべきリーダーが駄目だから、みんなは選挙しても変わらないから、と約半数の有権者が棄権しています。しかし、ロクな人が出ていなくても、その中から「よしまし」な人、よしましな政党に投票すれば、時間は掛かりますが、少しは良くなります。ただしインターネット情報ではなく、自分で新聞や選挙公報をじっくり読んで、政策を比較する必要があります。ネットにはいい加減な嘘の情報がありますから、自分で勉強して誰に、どの政党に投票するかを決めなければなりません。投票に行かないで、政治を批判する権利はありませんから、まず投票に行くことです。私一人が投票しても仕方ない、という人もいますが、「私一人が」集まればとてつもない数字になりますから、棄権は絶対やめてください。棄権者が多いことはリーダーにとって一番都合のいいことで、好き勝手やっていいという「お墨付き」になります。選挙に行くことは政治をきちんとやっているか、とチェックすることでもあります。選挙の後は公約を果たしているか、監視することも大切です。18歳の人はこれからの時代は自分たちで作るのだ、というぐらいの気構えを持ってほしい。福島県は原発問題を抱えていますし、日本国内では憲法改正の動きもあります。政治に関心をもって、自分の意思を一票に託してください。政治は難しいものではなく、生活そのものです。お茶を飲みながらでもいいですから、友達と政治について語り合ってください。

●9月勉強会の出席通知は9月10日までに

- 9月は9月24日(土)、東京・高田馬場IZUNOME TOKYOで応援団は、ニューヨークで活躍する世界的なジャズピアニストで、ジャズ界の大御所・秋吉敏子さんです。午前中は入塾説明会を行いますので、皆様、是非いろいろな方を誘ってきて下さい。出欠は9月10日までをお願いします。
- 10月は10月22日、二本松男女共生センター[予定]で、応援団講義は皆様ご存知の中原儀子先生
- 11月は11月19日、東京・高田馬場IZUNOME TOKYOで応援団講義は、世界的にも有名な照明デザイナーの石井幹子さんです。

これらの方々のほかに、鳩山友紀夫元首相、元三菱東京UFJ銀行会長の畔柳信雄さんと交渉中です。